

川口（藤本）洋子論文内容の要旨

主 論 文

Imaging diagnosis of pregnancy-associated ovarian tumors

妊娠に合併した卵巣腫瘍の画像診断

川口（藤本）洋子、磯本一郎、井上統夫、吉田敦、小寺宏平、増崎雅子、森山伸吾、
吉村秀一郎、Khaleque Newaz Khan、増崎英明

Acta Medica Nagasakiensia 58: 33-40, 2013

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻
(主任指導教員：増崎英明教授)

【緒 言】

超音波断層法の普及により妊娠初期に卵巣腫瘍が偶然発見される頻度は高くなっている。しかし、その多くは自然に消失する卵巣嚢胞である。妊娠中に認められる卵巣腫瘍の2-3%が悪性であると言われている。良性腫瘍の一つである *dermoid cyst* は多彩な超音波像を呈し、悪性との鑑別が重要である。一方、MRI は組織特性の判別に優れ、妊娠中の卵巣腫瘍の診断には欠かすことの出来ない検査法といえる。卵巣腫瘍と診断した際には妊娠中であっても摘出するのが原則であるが、妊娠子宮への影響を考慮すると、より早期により正確な質的診断を行う事が重要である。そこで、当科で手術を施行した卵巣腫瘍合併妊娠を対象とし、術前における画像検査（超音波検査およびMRI）で卵巣腫瘍の組織推定が可能か否か、病理所見との比較により検討した。

【対象と方法】

妊娠初期の超音波検査で卵巣腫瘍を指摘され、MRI 後に手術を施行した18例を対象とし、超音波所見、MRI 所見、および病理組織診断を後方視的に比較検討した。

超音波所見は、産婦人科認定医10名が超音波像のみを供覧し、卵巣腫瘍エコーパターン分類に基づいた分類および病理組織型の推定を行った。

MRI は T1WI、T2WI、fat sat T1WI 水平断像、T2WI 矢縦断像を撮影し、放射線科専門医がMRI 画像を読影し病理組織型を推定した。

【結 果】

病理組織診断では paraovarian cyst(1例)、simple cyst(1例)、mucinous cystadenoma (3例)、mucinous cystadenoma と dermoid cyst の合併 (1例)、dermoid cyst(9例)、lutein cyst with hemorrhage(1例)、immature teratoma(G1)(1例)、mucinous cystadenocarcinoma(G1) と dermoid cyst の合併 (1例)で、2例の悪性腫瘍が含まれていた。

超音波断層法のエコーパターン分類では、嚢胞性腫瘍は全員が嚢胞性パターン(1型または2型)に分類した。dermoid cystは混合パターン(4型)が最も多く48.2%、悪性腫瘍や境界悪性腫瘍との可能性が高いとされる混合性パターンや充実性パターン(4、5、6型)に分類されたのは62.9%だった。悪性腫瘍は充実性パターン(6型)および混合性パターン(4型)が多かった。超音波断層法での組織型の一貫率は25%で、dermoid cystのみを対象とすると一致率は37.3%だった。immature teratoma(G1)を術前に推定する事は全く出来なかったが、mucinous cystadenocarcinoma(G1) と dermoid cystを合併した症例では悪性と推定した人が60% (6/10)いた。

MRI では dermoid cyst は全例で正しく推定する事が出来たが、悪性腫瘍を診断することはできなかった。

【考 察】

超音波断層法において、隔壁の有無、内部エコーの性状、充実部の有無は卵巣腫瘍の良悪性の判断基準となる。エコーパターン分類では、エコーパターン毎に悪性腫瘍・境界悪性腫瘍の頻度が異なるとされている。しかし、最も頻度の多いdermoid cystの超音波像はきわめて多彩で、同一の超音波像に対する検者間での評価も異なっており、検者間による技量の差も影響すると思われる。

MRI は組織コントラストに優れ、形態の変化のみでなく組織の推定が出来る。MRI では超音波で多彩な像を示す dermoid cyst を正しく診断できたが、悪性腫瘍を指摘することが出来なかった。

妊娠中に卵巣腫瘍を認めた場合、超音波検査とMRIを併用した画像検査で術前評価を行い、手術を行った上での病理診断による確定診断を得る事が重要であると考えられた。